
宇宙ステーション

大和昇介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙ステーション

【Nコード】

N1824R

【作者名】

大和昇介

【あらすじ】

国際宇宙ステーション（ISS）に不穏な動きがみられる、ISSが行動を開始した時、地球人類は体験したことのない恐怖に見舞われる。

旋律の始まり<153>

ヤマセ

「ヤマセとステーションとの距離50メートル順調です、これより手動に切り替えます」

大型宇宙船ヤマセ船長高橋が無線を入れる、どんなに技術が発達しても、この作業だけは手動である。

「ISS了解、格納庫解放、徐々に距離を詰める」

ISS船長新井は指令を出した

「了解」

大型宇宙船ヤマセがISSの格納庫に入ってきた

「格納庫閉鎖、トラップをわたせ、整備班は直ちに整備に入れ」

「整備班、了解」

「ISSおよびヤマセ損傷ありません、成功です」

新井と共にISS中央指令室に詰めている副官新庄が笑みを見せた

「どうだヤマセ船長高橋さんにも会いに行くか？」

「いえ、船長不在の時に備えるのが副官の任務ですから」

「真面目だな」

新井は苦笑した

ヤマセ船橋^{ブリッジ}

「ご苦労さん」

「新井さん、久しぶりですね」

「ここにはどのくらい滞在するんだ？」

「3日だよ、ヤマセの整備が終わったら月基地経由で種子島宇宙センターに戻る、いいぜ」種子島は、今度遊びに来いよ、俺の宿舎もあるし」

「わかった、暇があったら行くよ」
「新井！お前同じことを2年前も言っただろ」
「そうだっけ？あまり覚えてないや」
「なんで、お前は生活関係は覚えなないんだ？宇宙技術の事だったらなんでも知ってるのに」
「それほどでもないよ、じゃあステーション内観光でもするか」
「ここは来るたびに増築してるから面白いよ」

第153区域

高橋は不思議に思った

「新井、第2、第3格納庫はまだ工事中なのか？」
「いろいろあつて工事が進まないんだ」
「そうか、今日はどこを案内してくれるのかい？」
「第153区域だ」
「153区域といえば最重要防御区域じゃないか！」
「そうだ、ついてきてくれ」
新井はそのまま黙ってステーション内連絡ポッドに乗るとコントロール版に<153>と打ち込んだ、
高橋も訝しげながらその行動に習い2つのポッドは153区域に向かった。
「ここが153区域か・・・」
そこには他のどんな区域にも無い様な頑丈な扉に暗証番号など複数の安全策が施されていた。新井が厳かに口を開く。
「ここに入る前に1つ約束をしてもらいたい」
「いったい153区域には何があるのか？こつこ期待

旋律の始まり<153>(後書き)

初めての投稿です、句読点の打ち方で読みにくいところもあると思いますが、どうぞ御了承ください

もう一つの旋律（前書き）

ISS内で進む陰謀、今回は地球防衛軍宇宙司令部が舞台だ

もう一つの旋律

地球防衛軍宇宙司令部

「ヤマセ、無事入港いたしました」

「高橋船長任務ご苦労」

大和大輔司令官は日常の任務をこなしていた。

「室井君」

大和は副官である室井凌を呼んだ

「なんですか、司令官」

「ISSから発せられるエネルギー量が多いように感じるのだが？」

「ISSでは様々な実験をしていますからエネルギー量がしょっち

ゆう変動するのはいつもの事かと、何かお気づきになりましたか？」

「いや、なんでもない・・・長年の勘だよ」

「調査を行いますか？」

「いや良いよ、ただの勘だ」

「こちら第1宇宙艦隊冥王星訓練宙域に到達いたしました」

「よろしい、訓練プランAの命令書を開封せよ」

「了解」

「やはり第1艦隊だけでは心細い・・・」

大和はつぶやいた

「どういたしましたか長官」

「新鋭艦隊ができるのはどのくらいかね？」

「現在資材の基地内搬入が終了したとの連絡が入ったところです」

「乗組員は？」

「新鋭艦隊はほとんど自動化されていますので乗組員の訓練は簡略化できます」

「それはよかった、嫌な予感がする、第1宇宙陸軍の訓練状況は？」

「人工衛星奪還チームを含め月面上陸防止訓練を行っております」

「何も起きなければいいが…」

大和の目はパネルスクリーンに投影されたISSに向けられていた。

この時の判断一つ一つがその後の大惨事を引き起こすことになる
とは、大和も思わなかった。

もう一つの旋律（後書き）

次回はついにISSが行動を起こす
ご期待ください！

主旋律

「約束しよう」

「いいだろう」

新井は暗証番号を入力した、153区域へと続くハッチが開いた
途端高橋は高橋は息をのんだ。

「なんだ、これは」

「指令室だ」

「それはわかる、しかしなんだこの規模は」

それはいつか見た地球防衛軍指令部に似ていた。

「分かっただろ、僕がしようとしていることが」

本当のところまるつきり分からなかった。

「分かった・・・」

新井は無線を手に取った

「プランAを実行せよ」

乾いた機械音が応答した

「了解」

「うあああああゝ！」

高橋はびっくりしした

「何が起きたんだ」

「誰が裏切るかわからないからな」

新井は冷酷に言った

高橋はもう新井についていくしか道がないと悟った

「やはりそういうことか、怪しいと思っていた」

そこにはISS副船長の新庄がピストルを構えながら立っていた

「やむを得ないことだ・・・」

「お前たちが行ったことは地球連合政府に対する反逆だ！」

新井は笑いながら言った

「やはり真面目だね・・・しかしそれが命取りになる」

瞬間、銃声が轟いた。高橋は思わず顔を背けた。

「地球は優秀な人材を失ったな」

新井の手には一筋の煙が漂うピストルが握られていた。

「乗組員を攻撃したのはいつたいなんだ？」

高橋は聞いた

「ドロイド軍だ、第2、第3格納庫で秘密裏に建造していた」

新井は誇らしげであった

「高橋、補佐をしてくれ」

「分かった」

「ドロイド1〜4は直ちに地球本星の対宇宙攻撃基地を攻撃せよ、

ドロイド5〜8は月面基地の宇宙船を破壊せよ、ドロイド9〜13

は敵人工衛星を攻撃せよ」

「全部隊了解出撃用意整いました」

「全部隊出撃せよ！」

指令室のスクリーンで格納庫から出撃するドロイド搭載のカーゴやドロイドが操縦する戦闘機が見えた、それらは2手にわかれると地球と月にそれぞれ向かった。

地球防衛軍司令部

「緊急、緊急！正体不明の大編隊確認、攻撃意思がある模様！」
司令部は凍りついた

「高度なステルス構造のため位置の割り出しはできませんが、出現した方位は153度域、丁度ISSの方向です」

「地球上にある全ての宇宙基地が敵により破壊されました」

「全てのミサイル基地も破壊されました」

「すべての飛行場が破壊されました！」

「ほぼ全ての人工衛星が破壊されました」

司令長官は呟いた

「なんとという速さだ・・・（待て、まだ月面宇宙軍が残されている）

月面基地から連絡はないか？」

「月面基地から入電！<月面陸軍は上陸艇が破壊されたので行動不能、宇宙艦隊と戦闘機隊も訓練のため冥王星宙域にいるため急行はできず>月面基地も敵から攻撃を受けているようです」

司令長官には気になることがあった。

「おい、<ほぼ全ての人工衛星が破壊された>とはどういうことだ残っているものがあるのか？」

一瞬、司令部に希望が芽生えた

「ISSです！」

「通信は？」

希望は広がりがつつあった

「通信、つながりました！」

「司令部の諸君、」

司令部は異様な空気に包まれた

「誰だ・・・君は」

長官は尋ねた

「元ISS船長新井だ」

「今は違うのか？」

恐る恐る訪ねた

「今はISS軍司令長官だ！」

「なんだと」

意味が分からなかった

「要求を言っ」

主旋律（後書き）

いっ!たい新井の要求とは何か 次回ご期待ください！

決戦（前書き）

とうとう最終回です、短いですが恐らくもう終わります

決戦

要求

「要求を伝える！」

地球防衛軍司令部にISS軍総指揮官新井の冷たく、よく通る声が響き渡った。

「これは地球連合政府に対する反逆である！今すぐ降伏せよ！」

長官も無駄と分かっているながらも対抗する。

「無駄足掻きはよせ、お前たち地球に戦う力がどれだけのこっている？もはや何も残っていない」

長官は悔しさのあまり倒れそうになった。

「私は、いや地球は最後まで戦い続ける！！」

新井は無関心そうに長官の言うことを聞き流していたが、この時口を開いた。

「要求は地球防衛軍の解散と地球連合政府の解体、この条件が飲めるようだったら次の条件を伝える、地球に不穏な動きがあるようだったらすぐさまISSの上陸部隊を市街地に送り込む」

司令部は静まり返った。

「ISSとの通信途絶えました」

「奴は要求を飲むたびにつけあがってくるだろう、しかし要求を飲まなければ無差別殺戮が起こる……」

長官は悩んだ挙句何の解決もできない判断を行った。

「……時間を……稼ごう……我々にはそれしかできない……」
その時、月面基地との通信回路が開いた。

報道

その頃、町では新聞の号外が配られ、テレビは緊急特集が数多く組まれ、インターネットではデマが飛び交った（新聞やテレビもデマ

ばっかだった(が)。その内容と言ったら宇宙人の侵略、地球の最後、この時は言われていた！宇宙人の脅威の技術力、銀河を牛耳る宇宙人、ついに地球上陸、このようにデマばっかだった、デマがデマを呼び、そのデマがまたデマを呼び、噂が噂を呼びその噂がまた噂を呼び、まさにデマと噂の嵐だった、その嵐は地球市民を震え上がらせた。恐怖の嵐とデマの嵐が融合しさらに大きな嵐が起きる、その嵐が作る大きな雲が地球全体を覆っていた。

またどこから漏れ出したのか、それともただのデモなのか？敵による大量殺戮計画の情報は地球市民の耳に入った。

月の裏切り

月面司令部の大和長官は重要な決断をした。

「我々は一時的に地球連合政府から独立する！」

副官は驚いて尋ねた。

「今・・・なんと」

「我々は一時的に地球連合政府から独立する」

(なぜ?) 副官はそう思わずにはいられなかった。

「敵は地球が要求を飲まない場合無差別殺戮を行うだろう・・・地球が反撃を開始した場合も同じだ」

「だから・・・」

「そうだ・・・現在火星宙域にいる第1艦隊と第2艦隊所属になる予定だった第2艦隊航空隊を動員する」

「しかし・・・勝算は？」

「君は戦わずに負けるのか？」

副官は気付いた(司令はこの戦いで戦死しようとしておられる・・・)

「分かりました、まずは何をいたしましょう」

「地球防衛軍司令部と通信する」

副官は通信回路を開いた。

「月面司令部の大和だ、月面司令部は現在から地球防衛軍から独立を宣言する！以上」

その時、宇宙遊泳者を保護したとの連絡が入った、まさかその宇宙遊泳者こそが戦いの命運を握っているとは流石の大和も気付かなかった。

「第2艦隊航空隊は発進用意、第1艦隊は直ちにISSを攻撃せよ！全月面陸軍は対空迎撃戦闘用意」

月面基地は最後の戦いに向け準備を始めた。

高橋の怒り

高橋は新井に疑問を覚えた、「秩序を地球に与える」と言っていたが今新井がやっていることは地球に恐怖を与えているだけだ、そして地球との通信の時高橋の怒りは最高潮に達した（無差別殺戮だと、話が違う）高橋は新井が通信に夢中なうちに船外監視システムの電源を切り宇宙服を着ると船外に飛び出した。

（どのくらい彷徨っただろう、あれ？）僕はふかふかなベットに寝ていた、ここは。考える暇もなく事務的な質問が飛んできた、

「なぜ宇宙を彷徨っていたんですか？」

「僕はISSにいた」

「ISS?!」

僕を調べていた男は立ち去った、その後に来た男には見覚えがあった。

「大和指令！」

「高橋君じゃないかいったいどうしたんだ」

「ISSに居ました、新井船長に説得され、しかし新井のやっていることは間違っていると思ったんです、それで怖くなって・・・」

「そうか、ISSにいたならISS軍の弱点を知っているんじゃないかね？」

高橋はまさにISS軍の弱点を知っている

「ISS軍の兵士はISS本体からエネルギー補給を受けています、

なのでエネルギー送信機には常に大量のエネルギーが集中しています、なのでエネルギー送信機を爆破すればISSごと吹っ飛びます同時に兵士もエネルギーが切れ使い物にならなくなります」

まさに目から鱗だった

「ならば艦載機で・・・」

「ダメです、ISSには高度な防御システムをもっています、だから」

「だから？」

「私に行かせてください」

「何?!?!?!」

「艦載機でISSの近くまで行きそこで艦載機から離脱します、ここからは手作業で直接送信機を爆破します」

「任せよう」

「ありがとうございます」

決戦

高橋の乗った戦闘機は多数の護衛に囲まれて発進した、ISSに近づくとも猛烈な対空射撃が襲ってきた、護衛が何機もやられた、それらに紛れて高橋は戦闘機から離脱した。

目が覚めて高橋の数メートル先に送信機があることに気付いた、高橋は痛みを堪えながら這って行った、送信機はとても熱かった、高橋は小型の爆弾を取り付けた、(よし、離脱だ!) 離脱と同時に送信機は爆発したISSは木端微塵になった、高橋も吹き飛ばされた。

「高橋を収容しろ、」

大和長官の命令が飛んだ。

「探知不能、生命探知機が熱でやられました」

「目視でもなんでもとにかく探せ〜!」

大和は必死だった

「地球を救った英雄を殺すか！」

しかし高橋は見当たらなかった、地球は救われた、高橋はどんな気分かで死んでいったのだろうか読者にも考えていただきたい。

作者・大和昇介より

決戦（後書き）

いかがでしたか？他の作品もどうかお読みください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1824r/>

宇宙ステーション

2011年4月11日10時15分発行